



理事会だより (9・14)

- 一、令和五年度小田原秋季俳句大会 ①選句は全て揃い十九日に点盛、市長・議長出席調整中、商品手配は田中幸子さん(事業部) ②大会当日の役割分担を一部修正の上決定し十月理事会で最終確認。寿齢者表彰の段取りを決定、記念品手配は米山翠さん。(総務部)
- 二、秋の吟行会は十一月一日(水)に大雄山最乗寺にて実施の細目を決定。(本号12頁) (会計部)
- 三、第60回梅まつり俳句大会(六年二月十日土曜日)の ①兼題、要項を決定(詳細は本号12頁)。 ②選者特選賞は佃名誉会長、大石顧問、池田会長、零・鷹・沈丁の各グループ。 ③季語「梅」の範囲を明確にするため「春に限る」との注意書きを入れることになった。(事業部)
- 四、次期会長を選ぶ指名委員会委員に副会長、各部長・次長、事業部事務局アドバイザーの十一名を選任、長谷川副会長を委員長として十月理事会の前に開催することに。

「俳句おだわら」10句抄 (673号より)

出澤洋子 抄出

古墳より彼方のビルや青嵐
 梅雨晴や家族の数の傘を干す
 噴水の自律神経乱れしか
 三里には灸を卯の花腐しかな
 ラベル貼り行先決まる梅酒かな
 進水のシャンパン割れて雲の峰
 石蹴りのチョコクの跡や夕焼空
 地図を手に古き町並氷旗
 門灯の届かぬ先に百合白し
 日雷ゼウスは今日も女好き

中村昌男 抄出

村の空ゆすりて梅を落としけり
 梅を干すひと粒づつに日の匂ひ
 白南風や今際の息の和らぎて
 早苗田の朝日に映ゆる雲の彩
 酒匂川鮎の瀬を追ふ竿さばき
 ようやくに座の静まりて夏料理
 雨粒に硫黄の臭ひ山法師
 半夏生心と体の声を聞く
 天辺は妖精の城雲の峰
 風鈴へ物足りなさの迷い風

石田加津子
 肥後ちさこ
 内田知江子
 尾崎 一夫
 柏木 良花
 田下 昌人
 米山 翠
 小林 環
 田畑ヒロ子
 大佐田うづき

池田 忠山
 吉田 百代
 神山つとむ
 若村 京子
 田淵 令子
 斉藤 静
 守屋 まち
 石井千代子
 中村 裕子
 岩楯恵津子

元駅長さん 岩楯恵津子

元駅長夏服の背の丸味かな
 空蟬や人生再度挑戦す
 夏風邪の友の強情論しけり
 蟬の声墓地を通りてそれつきり
 病葉や施設の友の返事なく
 岩壁に居て土用波に船酔いす
 夏休み婆にゲームは出来ません
 最後まで見送る棺驟雨来ぬ
 揚花火怖いこわいと部屋中を
 花火終え舟はゆるりと残る星

夜寒 石井きよ子

空き家なる庭の桔梗の三年かな
 揺らめいて闇を呼びたる藪枯らし
 霧はれて里山静かに新たなり
 父を追う子を追いたるや秋の風
 竹籠に林檎一つのありのまま
 団栗の落ちて土竜の塚の上
 似た背の二つ並びて十三夜
 足元に犬もすり寄る夜寒かな
 茅葺き光る金秋の旅籠宿
 小六月気づけば寝息犬と夫

俳句おだわら(9・19メ切り、到着順)

◆小田原鹿火屋(8・25) 久江報

地の神へはねとの舞ひやねぶた祭 足立 和子

作務僧の腰の蚊遣の香の揺らぎ 川本 育子

青年の弾む言の葉星月夜 高橋 小糸

爪を切る手足自在に涼新た 山崎 悦子

鎌倉の五山ととのふぼんぼり祭 近藤 久江

◆香雨・梅ごち(8・27) 忠山報

見渡せば海見上ぐれば星月夜 肥後ちさこ

日蔭こそ色濃く咲けり杜鵑草 関戸わよこ

道の辺の草のそよぎも秋景色 青山 典子

富士五湖の一つ一つに盆の月 門松 鳳文

トーストにバターたつぷり今朝の秋 吉田 百代

手と足が先に応へて盆踊り 吉田 康雄

新涼や川原で復習ふサキソフォン 陌間みどり

新涼や素焼の壺に草一輪 小澤 純子

秋立つや葉のそよぎにも葉擦れにも 池田 忠山

◆こよろぎ(9・14) つとむ報

新盆や祖母の筵にたむろして 高杉掘三朗

草紅葉 近藤久江

書を語る師や山門の虹二重
 水鏡夏越しの鳩の身繕ひ
 ぼんぼりに浮かぶ宮居や明日は秋
 墨磨りて李白も杜甫も涼新た
 裏打の水踊らせて秋灯下
 達磨描く筆より生るる秋のこゑ
 書き連ね草書千字や秋気澄む
 夕月夜料紙に和歌のはなやげり
 円相の軸の秋澄む宇宙かな
 草紅葉詩人は言葉かがやかす

エレジー
 昭和悲歌 尾崎一夫

赦すまじ噫赦すまじ原爆忌
 往還の拾ふ馬糞や敗戦日
 サングラス意気揚揚とマッカーサー
 父さんは靖国神社夜学生
 掌を返す先生土手南瓜
 竹皮を脱ぐ浅草のフランス座
 竹槍の竹には非ず竹を伐る
 冬が来るくる横浜に立つ娼婦
 奴隸ではないぞと次郎菊枯るる
 人間は人間ですよ去年今年

妙高の燃ゆる火を見たナナカマド 板谷 雅泉
 人恋ふる花野にながく佇みて 植松テル子
 おもむろに手を伸ばしたるかき氷 神山つとむ
 ◆山北(8・24) 由里子報
 独り居の独り言いい打ち水す 和田恵美子
 看護師の手際良き処置百合の花 尾崎 幸子
 稲すずめ富士に連なる吊し雲 星 一義
 急坂の団地行きバス法師蟬 石田加津子
 迷走する台風ワサビ絞りきる 竹下由里子
 ◆鷹(9・8) 十五報
 点火待つ花火師の声対岸に 青木 孝子
 新涼や蔵を借りての陶芸展 池田 令子
 馬の瞳のいづこ見て澄む晩夏かな 西賀 久實
 色変へぬ松の盆栽遺されし 佐宗 欣二
 終戦日土間に散らばるスニーカー 須田 晴美
 仁王門ぬけて石段菘こぼる 中田 笑子
 島に遺る煉瓦の兵舎秋の声 百川 秀子
 新顔の若人踊る社かな 山崎美知子
 珈琲を断つ一日や終戦日 柏木 良花
 千屈菜や軍馬も祀る忠魂碑 庄司 下載
 トリマーの鋏滑らか秋立てり 瀬戸 りん

ピアノ発表会 竹下由里子

白靴の硬き音たて中央へ
 五才児のスパンコールのサンドレス
 リボン揺らしパパと連弾青りんご
 木槿垣「魔王」に挑む黒マスク
 鍵盤は静かな水面ハンモック
 色鳥やひとりに音の一つずつ
 香水やピアノ弾く腕ハープめく
 「ポロネーズ」の二の腕の美し夏木立
 現われる天の橋立鶺鴒高音
 息ひとつ吐き「月光」へ夏シヨール

秋の七草 佐々木重満

執権の栄華ちりぢり萩の寺
 穂芒波青年の夢数多消え
 葛の花解に辿れぬ方程式
 撫子や芯麗しき刃文
 女郎花客の嘘にも揺らぎ見せ
 謀反の咎潔白なりし白桔梗
 藤袴妣の小言が蘇る
 海霧立つニュートンの佇つ岸边
 秋澄むや丹沢連山の地底
 秋夕焼杞人の憂えふとよぎる

竹伐るや竹二三本騒がせて
 流水のがんと横たふ残暑かな
 ベロ藍に暮れにし空や夏の月
 船着場よりの風道浜おもと
 秋祭水ヨーヨーの係なり
 出陣の遠き法螺貝真葛原
 しんしんと鳴る風鐸や月明り
 足垂らし縁に鬼灯鳴らしけり
 小気味よくフェンスを鳴らす庭叩
 歯磨のチューブ絞れる残暑かな
 川面打つ強き雨脚敗戦日
 白水を畠へ撒きたり今朝の秋
 こすもすやエステ帰りに鏡見る
 冬瓜の切り売り一つ買いにけり
 洗ひあげ小菜こなのみどりや空高し
 朝霧や親にすり寄る岬馬
 頑張れと走る我等に虫時雨
 一分の黙禱長く敗戦忌
 夕闇のきざす坪庭鉦叩
 隣国は選べず夜霧果てしなく

◆沈丁（9・7）

寶子山報

高橋久美子
 中山智津子
 齊藤 桂
 芹澤 常子
 大木 敬子
 大島美恵子
 田下 昌人
 中根 和子
 加藤 幾代
 高橋千代子
 守屋 まち
 米山 翠
 來田 新子
 大沢 年子
 片野 秋子
 小林 環
 下平 美子
 鳥海 壮六
 古屋 徳男
 村場 十五

落款の朱 山崎美知子

白南風やデッキにのぞむ大鳥居
 夕立の合羽に音の連打かな
 棚経や幼は爺の膝の上
 二駅を歩いて帰る稲の花
 掌につつむ鸚哥の鼓動秋の昼
 手遊みの二個の胡桃や叔父無口
 母の背の丸みますます十三夜
 空澄むや小高き丘の鯨塚
 山畑の坂下り来れば曼珠沙華
 落款の朱のけざやかや秋深し

大きな岩 田畑ヒロ子

動かない大きな岩の八月来
 夏帯を強く叩きて一歩出す
 水澄みぬ透きとおりたるソプラノ
 どんぐりの数多一粒ずつ拾う
 コスモスや身体明るくして帰る
 虫時雨夜を湿らせて更けて行く
 秋蝶の翅を畳みし淋しさよ
 ひまわりの咲きたる町の膨らみぬ
 兵士に親石榴の割れは忿怒なり
 万歳はしないと決めし案山子かな

萩こぼる人の気配の無き夕べ
 制服で石抛り合ふ秋の川
 階きざしを被ひつくして山の萩
 わかきらの合唱聞ゆ萩の宿
 四万十の川は蜻蛉の国となる
 捨て屋敷昔をおもふ萩が咲く
 白萩のパン屋に座するハスキー犬
 川遊びの飛び交ふ声や鰯雲
 風説に付け足しもありこぼれ萩
 白萩や引つ越しすると告げらるる
 八月のスーパームーン部屋いつばい
 野の空の灯纏あかしひぬ萩の花
 ささくれたところに薬萩の寺
 夜行列車の灯をとり込んで九月の川
 ◆春野（8・20）
 羅漢仏に悪相一つ竹煮草
 諍ひは苦し秋刀魚の腸旨し
 サングラスにも時代遅れの有りにけり
 流木をほつたらかして秋の海
 いかづちに応こたへてゐたる尾骶骨
 一句二句できればよろし西鶴忌

若村 京子
 柳澤ミサ子
 田中 恵一
 河本 純子
 瀧本 敦子
 勝木 澄子
 菅野 英余
 高井 幸子
 片野 節子
 峯尾ユキエ
 清水美代子
 松下 俊之
 武居裕美子
 寶子山京子
 きよ志報
 秋山 昇
 伊藤はる子
 内田知江子
 尾崎 一夫
 瀬戸 悠
 二見 和江

パイプ椅子百脚生身魂百人

長谷川きよ志

◆青梅(9・13)

幸子報

新涼や初孫おおき声で泣く

大塚 行人

じゃんけんに負けてコーヒー挽く夜長

湯本とし子

秋霖や点いては消える常夜灯

加藤まり子

台風之それで安堵の農夫かな

久保寺トミ子

白玉や百歳めざしレース中

田中 幸子

◆みなみ(8・19)

かほる報

秋茄子のうまさ言ひ合ふ朝餉かな

齊藤 静

夕立に帰宅時間を教えられ

小瀬村信子

秋夕焼飛行機雲も染まりゆく

柳川 紀枝

台風圏雨粒逆さに飛んでゆく

加藤 富江

秋なすやむらさき似合う妣でした

加藤れい子

光るまで床を磨くや秋はじめ

加藤 健治

双眼鏡小さな秋を引き寄せる

市川めぐみ

秋茄子や晩年という自由席

豊田 幸枝

駅ビルの通路は迷路いわし雲

加藤かほる

◆おほる(9・13)

秀泰報

虫の夜夢は昭和へ迷い込む

中根登美子

嘘ついて針千本の栗の毬

中津川晴江

夜なべするちちはは若き夢で会う

二上 光子

おちこちに巡る命の虫の声

廣田 悦子

すがれ虫寂しい時は歌いけり

中村 昌男

雨上がり夕闇揺らす虫しぐれ

高橋みどり

良きことの兆しありけり鱗雲

香川 花子

老犬へ家族の絆晩夏光

石井千代子

快哉の聞える窓に虫時雨

石井きよ子

心太人はそれ程やわでなし

小野 菊土

天高し軍事衛生監視中

横塚 昌平

ホルンの音響く山並秋澄めり

加藤 春江

口閉ざす戦地知る人敗戦日

風間 秀泰

◆たけのこ(9・13)

悦女報

バリトンの響く本堂秋彼岸

三木 泰子

夕厨一勢に鳴く秋の虫

徳田 公子

白秋のしだれて美しきははの影

小宮 早苗

応援歌汗と涙の砂集め

久津間百合子

母娘して手相や秋の中華街

宮崎 悦女

◆零(9・21)

史郎報

花野行く花の詠嘆聞きながら

青木たけを

ひらがなの思い出仕舞う青胡桃

伊藤 道郎

綿の花口に合ひて嬉しき甘さ

川合 昌子

風評に蜻蛉めがねも曇りがち

佐藤 正子

蒼茫な海を見おろす花野かな

中村 裕子

忘れ椅子木蔭にひとつ夏終わる

野川木 一路

蟪蛄やなべて勝ち負け人の世も

岡本 史郎

◆実のり(9・13)

たか志報

恙なく一日が過ぎ大西日

岩本ひさみ

病室に友の絵手紙葛の花

杉本 久子

秋暑し売れ残りたるバザール品

木村 幸枝

燈台へ一本道や葛の花

新井たか志

◆草むら(9・19)

重満報

消しゴムで消せそうな色明けの月

石井 秀稀

郭公よ悪三昧になつてやる

佃 悦夫

秋の風失恋いつも相似形

佐々木重満

◆無所属

指先へ集める血糖秋深し

小林永以子

幾人を謀殺したる青磁枕

畠 梅乃

流灯の速き別れや雨後の川

一ノ瀬茂代

花薊看護を受くる身に馴れず

出澤 洋子

うつすらと名残り扇や紅のあと

山本 すみ

秋暑し小銭すつきり使い切る

岡田 典代

ぐうの音も出ぬほど残暑続くなり

小澤 園子

螢追ふ還暦過ぎし漢の子

大佐田うづき

蝉落ちてあとは地に棲む風任せ

木村美千代

葉鶏頭食堂の皆車椅子

岩楯恵津子

炎天や水消器から水出し切る

瀬戸 正洋

松手入れ最後は垣根チェンソー

蓑宮 わか

防災の倉庫でんけん震災忌

青木 勝子

妖怪も鬼も案山子になつてをり

北村 文江

まだ開けぬドロップ缶や震災忌

山口 千代

波寄せる音従えて夕月夜

田畑ヒロ子

酒好きな人の一生夏椿

山田 照子

法師蟬や極楽にいくあてもなく

穂坂志げる

祝膳お頭つきの秋刀魚かな

神野美代子

追はれたる鰯だんごにあまたの目

須田 聡子

QRコードの不思議青みどろ

杉山あけみ

ぴよぴよ鳴く火山灰が降っていた

大石 雄介

零の輪と満月小田原上空に

大石 和子

*

理事会日程

10/12、11/9、12/14

(毎月第2木曜日けやき15時より)

木村和彦師遺句抄(岡本史郎抄出)

ぼろぼろの少女を愛す渇水期

低温期の妻抱く狙撃兵のかなしさで

峡で死ぬ母つねに影絵で渡る橋

傷もたぬにんげんが来る森林軌道

快晴の猿人直立した朝だ

かさかさと林道をゆきタケルに遭う

いっぼんの木を伐り原人に近づく

寒林の明かるさそれは他人の食卓

昏れる家から糸くずとなり泳ぎ出す

硬直するメツキ場裏のタンポポは

旅人として故郷の清水手で掬う

独りでも生きて行けるよなあ蜥蜴

人間愛あふれた魂の師

岡本史郎

和彦師は七月二八日未明、葵の園にて永眠された。前日、園に呼ばれ大石雄介氏と青木たけを氏、それに師の介護や渉外すべて担った甥御さんと最期の面会ができた。耳元で「がんばって!」と声かけすると「モォー」と返事をしてくれた。でもそれは七年前に七年前に先立たれた妻のみさをさんの傍に「モォー行くよ」「もういいかね」だった気がする。

葬儀には協会の役員や零句会の仲間が沢山列席して下さり、あふれるほどの胡蝶蘭に包まれて旅立たれた。師の俳句道は第一句集『原人』に詳細があり、第二句集『さがみ野』にも紹介されている。昭和三十二年小田原移住後、山本鶴丘主宰「爽籟」、佃悦夫氏との交流で「海程」にそして金子兜太氏を生涯の師と決め、終生活躍された。協会の役員としても六十年以上支え続けた。国府津学習館での俳句講座より零句会が芽吹き、今年で二十年目となる。

私はわずか五年目の弟子だが、今、空き家となった師の家を守り、師の蔵書や句集を読ませていただきつつ、師の魂に近づけられるようにしたい。浄土で再び会えたら褒めてもらえるように。

享年九十二歳

鎮魂・木村和彦さん

佃 悦夫

いま、狭庭の縁に目を遣りながら書き始めた。茫々七十年という付き合いの経つことの速さよ。

本名の和七とは昭和七年生まれに由来すると聞いている。私より二年々長ということになるが年齢が接近していただけに話題も共通する処が多々あった。オトコとしての良いことも悪いこともダイレクトに教えて貰った。公表を憚かる事もあったが私の人生の中を与えてくれたこと、間違いない。

終生、少年のような感性を貫き純粋度抜群。家族ぐるみの付き合いだったが何よりの想い出は私の二人の息子が就学以前の夏、五十年以上のことになるが伊豆の今井浜に行った。水と泥んこの遊びを思う存分に肌で触れたことは息子たちにとつて一生の想い出だろう。

彼の生まれは茨城県だが、仮に都会人と田園の人のタイプがあるとしたら間違いなく田園の人。川に入つて魚を掴み取りもし家庭菜園の人でもあった。私の息子たちが未就学児の頃、箱根連山の麓の三竹山に兜虫や鍬形虫を探りに行ったことがあり、その時の木村さんは、それこそ少年のように夢中で採ってくれた。私

ときたらまるで駄目、一匹も採れず辛うじて象虫が採れたに過ぎず、帰宅して家内から冷やかされ面目ゼロ。去る八月五日、小田原駅前の湘和会堂を式場として厳肅に執り行われた。夫人は既に亡く、子宝に恵まれなかつたこともあり夫人の弟さんを指名してあると言つていたが、その青年後見人らしき人が喪主として忙しく立ち働いた。

長年の俳句の盟友でありライバルでもあったが、出棺の際に思わず涙声でサヨナラを告げた。柩の一部を担つたが重かつた。歳月の重さでもあった。

親しかつたはずの俳友の何名かの顔が見られず、故人としてももちろんだが私は淋しかった。連絡不十分だったのだろう。

足柄上病院から栢山の介護施設「葵の園」に転院した頃は会話もままならないようだった。私も木村さん同様に家内に先立たれ十二年、葬儀を終え帰宅してしばし呆然。「海程」以来の盟友とのこれまでの付き合いを想起して天井を見上げるばかりだった。

「海程」の創刊期に私と前後して入会以来、ずっと肩を並べて来たのに。

今頃はみさを夫人の待つ浄土への道を急いでいるのだろうか。

田淵令子遺句抄(田中幸子抄出)

掘り返す鍬になじみし春の土

春の朝村一軒の乳搾り

朝桜奥の院より経流る

一灯に足るを知る日々芹の花

さざえ売り潮の香りも売りにけり

神宿る杉百幹に秋を知る

こほろぎや納屋の大甕捨てちまを

脇役に生きる生涯花八手

里の秋地物煮しめてもてなせり

冬立つや乳牛の体温手に計り

湯治場の小さき朝市寒卵

大寒や独り暮しの戸の軋み

曾我野

田中幸子

下曾我に生まれ、梅の香に囲まれ、青梅の実るころが大好き、生涯曾我野を愛し続けた田淵令子さんが、七月二十九日亡くなりました。

小田原俳句協会に名を残す同郷の神保蟹平、川久保野人、佐宗芳江氏のご指導を受けつつ、俳句仲間として長く、長く俳句作りを楽しまれました。そして「青梅の会」の仲間を思い、歯切れのよいリーダーでした。「曾我梅まつり俳句大会」が五十八回という長い歴史を残すことが出来たのも、ひとえに先人からのバトンをしっかりと引き継いだ令子さんの努力でした。

又、令子さんは新装なった小田原三の丸ホールでの令和四年四月「藤田湘子記念小田原俳句大会」一般の部一四四四句の中で見事大会賞を受賞されました。

点けて一人消して独りの夜長かな

令子さんの実感のこもった素晴らしい句と思いました。柩にはこの大会賞の短冊を納めさせて頂きました。百年に一度という、この暑い夏に逝かれた令子さんを私達は決して忘れません。

令子さんありがとう 享年八十六歳 合掌

香川 花子

朝顔や父より繋ぐこぼれ種
草刈女地球の片隅整えて
朝いちばん木槿の小道子等が行く
全開のシャワー弾いて汗の顔
佐渡鳥空に浮んだ鰯雲

一ノ瀬茂代

山胡桃供へて暗き祠かな
大和歌に詠まれし峠霧深し
赤とんぼ無人の駅の切符箱
物忘れ笑って嘆いてむかご飯
日面も日裏もさびし野紺菊

青木 勝子

そのたびに化粧濃くなる帰省の子
秋暑し泣きながら兄を追ふ幼
耳鳴りのごとく終日虫すだく
寝る間際まで窓を開け夜来香
爽やかや行って来ますと子らの声

青木たけを

存へて秋茄子焼いたり煮たりかな
熊蟬の異常な叫び地球危機
数列の俳句となりて雁渡る
沖繩をおいてきぼりに夏行けり
極上の月を歩いて我家まで

俳句おだわら鑑賞（令和5年8月号より）

柳澤ミサ子

領づきてまた一匙のみぞれかな

菅野英余

百令を越えられ、心身強靱な精神力をお持ちのお父様とお聞きしており、尊敬と感謝、慈しみを込めて作者はこの句を詠まれたことと思います。

高齢になると食が細り少しでも食べてもらいたいと、口当りやカロリーを工夫し一匙一匙おいしいでしよ、食べてねと話しかけながら口に運ばれたのではないのでしょうか。細やかな見守りはやさしさそのものです。猛暑の日々、一番のご馳走は、英余さんみずからの氷水であったことと思います。

高橋みどり

万緑にさざ波のみの湖畔かな

久津間百合子

年々暑さが厳しく凌ぎ難い今日此の頃、この句の清涼感を味わいました。一枚の絵を見ることです。空は広く青く山は万緑である。山の木々の緑も色増し艶よく美しく、季語が際立ちます。

山に囲まれた湖はさざ波のみの湖畔であった。人氣もなく静かに佇む湖。微風に添うてそよぐさざ波に輝きと長閑さを感じます。

湖畔の一時の安らぎが羨ましいです。そんな心休まる一時を過ごしたいと思いました。

第60回小田原梅まつり俳句大会

第一部 作品募集

兼題

「梅」(春に限る)「春待つ」(いずれも傍題可)各一句一組 未発表作品に限る

締切

令和五年十二月一日(金) 必着

整理費

一組に付き千円(句稿に同封、何組でも可)

投句先

〒258・0053 小田原市堀の内七九

須田聡子 ☎〇四六五―三六―〇〇九四

*作品は原稿どおり印刷します。

選者

協会役員及び各地有力作家(投句者に限る) 県知事賞以下二十位まで 選者特選賞六人

賞

第二部 俳句大会

日時

令和六年二月十日(土曜日)

会場

小田原市民交流センター(UMECO)

受付

十一時 投句締切・十二時 開会・十二時半

整理費

五百円(呈飲料)

席題

春季雑詠一句と席題当日発表一句 総互選

賞

市長賞以下五十位まで(結社賞含む) 参加賞

(主催)

小田原市観光協会 (主管) 小田原俳句協会

(後援)

各地俳句協会

*各グループは当日までに結社賞をご用意下さい。

*会場は飲食可能です。マスク着用など感染症防止対策にご協力ください。

秋の吟行会

日時 令和5年11月1日(水)

会場 大雄山最乗寺信徒会館

参加費 五百円

受付 11時30分

投句締切 12時30分

出句数 3句(秋季詠)

句会 総互選(全員に参加賞)

*信徒会館での飲食は可、信徒会館以外は立入り厳禁

*事前申込は不要

照会先・寶子山京子 ○四六五―四七―八二二五

◆お詫びして訂正します。(674号)

3頁 寶子山京子さんの引用句

(誤) はたた神ひがなとろ火を構いたる

(正) はたた神ひがなとろ火を構ひたる

5頁 青梅4句目

(誤) 吹き抜ける風に初風をさがしけり 久保田トミ子

(正) 吹き抜ける風に初秋をさがしけり 久保寺トミ子

9頁 田下昌人さんの一句目

(誤) 夜店ポポポアスレチンガスラムプ

(正) 夜店ポポポアセチレンガスラムプ